

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	石坂 安希
論 文 題 目	1920 年代から 1930 年代における宝塚歌劇の演出様式 ——白井鐵造のレビュー作品を中心に——
<p>審査要旨</p> <p>1920 年代から 30 年代にかけての宝塚歌劇を対象として、レビューの形式を取り入れて、宝塚独自の様式を確立する上で最も大きな役割を果たした白井鐵造の演出手法について、初めて学術的な分析を試みた論文である。</p> <p>第一章では、1924 年の宝塚大劇場の完成による小林一三の大劇場主義の達成と、それにとまなう宝塚の演出家たちの動向を追う。「宝塚情緒」を築いて絶大な支持を得ていた久松一聲は、大劇場空間の演出からはそぐわなくなり低迷してゆく。代わって支持を得てゆくのは、グランドオペラの演出に定評のあった岸田辰彌で、初のレビューとされた「モン・パリ」上演によって、宝塚の新時代を招来してゆく。さらに新進の白井鐵造が、舞台全体を絵画のように彩ることのできるスケールの大きな演出手腕で頭角を現してゆく。1920 年代から 30 年代にかけては、おおよそこの 3 人の演出家の動向に集約することができるという視角が示される。</p> <p>以上のような経緯を、久松一聲の「空也鉦流罪」(1925)、岸田辰彌の「ユーディット」(1925)、白井鐵造の「エミリーの嘆き」(1924)を取り上げて、各作品を雑誌『歌劇』等に掲載された台本および、各種の批評や見聞などを多角的に組み合わせることによって立体的に復元して、細部を検証しながら明らかにしてゆく。以下にも繰り返されるが、この、具体的な作品分析の手法が本論文独自のものと言うことができる。</p> <p>第二章では、白井鐵造によるレビューの初期代表作となった「パリゼット」(1930)を取り上げて、「本格的なレビュー」の上演をめざした同作が、本場のレビューの舞台そのままであるかのような印象を観客に与えるに至る経緯を分析している。ラインダンスやタップダンスの移入をはじめ、舞台美術、メイク、衣装、音楽といった細部に至るまでパリのレビューの要素を組み込みながらも、観客の好みや生徒の上品な雰囲気に合わせて改変をほどこすことによる効果が、批評や投稿にどのように反映され、観客の支持につながっていったかが示された。白井鐵造は、こうした成功を収めながらも、少女のみを構成員とする劇団でレビューを上演し続けることの成否に危惧を抱き、レビューによって生徒たちの個性や才能を伸ばし、スターを育てる役割を担わせようとしていたことが、白井自身の言説を詳細に分析することによって導き出されている。そして、そのような白井の志向が、「ローズ・パリ」(1931)の演出の中で、具体的にどのような生徒たちの活躍の場を与えることにつながっているかが、個別に検証されている。</p> <p>第三章では、大レビュー「花詩集」(1933)の具体的な場面や演出を考察し、これが東京宝塚劇場の開場公演の演目にも選ばれたことの意味を検討している。小林一三の唱える、家庭本位の娯楽、大衆であることをめざすための大劇場主義といった、興行理念に合致しつつ、芸術的な完成度もきわめて高く評価された本作を代表的な成功例として、白井鐵造によるレビューが、宝塚少女歌劇を象徴するものとみなされてゆく過程が考察されている。</p> <p>第四章では、そうした白井鐵造の成功にもかかわらず、もしくはその成功のために、演出の質の高さは広く認められながらも、パターン化された演出についてマンネリズムを唱える声も高まってきたことが指摘される。そのような時期の白井鐵造作品については、「ラ・ロマンス」(1936)の詳細な分析と、稀少な映像資料を交えての分析によって、具体的な細部が検討され、批評や言説によって裏付けられている。白井鐵造はこうした状況を打開するために、1936 年 10 月からドイツ、イギリス、アメリカを歴訪して、37 年 9 月に帰国する。新帰朝土産として公開された「たからじえんぬ」(1937)の具体的な構成の分析と、言説の調査によって、白井が、パリでの定番的な演出をどのように取り入れ、位置づけることによって、宝塚少女歌劇らしさを構築していったかが検証されている。</p>	

氏名 石坂 安希

以上のような検討を踏まえて、白井鐵造の功績とは、宝塚独自のレビューの演出様式を築くことに尽力し、一過性のレビューを宝塚歌劇において永続的な種目へと昇華させようと努めた事である、との結論が導き出されている。現在でも宝塚歌劇ではどの公演でも必ずと言っていいほどレビューが上演されており、芝居のフィナーレについては基本的に同じ構成が組まれている。それらはマンネリズムとして批判されるべきものとは見なされておらず、現在では「偉大なるマンネリ」という形容によって積極的な評価がなされている。「偉大なるマンネリ」とは、レビューに限らず芝居の演出様式にも及ぶものであり、お決まりの宝塚の型を指すものと考えられる。宝塚歌劇は、こうした様式を独自の魅力とすると同時に基盤としており、その様式の上に新たな演出やスターを配置し、宝塚歌劇を時代と共に進化させていった。白井鐵造は、その基盤となる様式の、少なからぬ部分を築く上で大きな貢献を果たしたと位置づけられている。

以上のような成果に対して審査委員会では、まず第一に、丁寧に同時代の『歌劇』を読み込んで上演場面を再現し、きめ細かい作品研究を行った点が高く評価された。それによって、先行研究が提示した仮説を実証的に検討し、その多くを実証的に裏付けることができたという点でも高い評価を得た。

一方で、同時代の宝塚少女歌劇を取り巻く外部の環境との比較については、積極的に論文に取り込んだ形で議論を深めるべきとの注文も出された。国内外の演劇、演芸の世界、無声からトーキーに移り変わる映画界など、激動の時期にあたるだけに、広く多くの事例を参照することで、用語の定義なども深まる可能性が指摘された。論文の注の形では問題点の整備や指摘はなされており、議論を深める用意はかなりなされているものの、いくつかの論点が参考文献を掲出することに委ねられているところもあり、これらを行論に組み込んでゆけば、さらに説得力を増したであろうことが指摘された。

しかし、当該期の宝塚歌劇の重要性を、実証的な分析によって解明しようとした事例はきわめて少ない。本論文のように、白井鐵造と同時期の演出家の具体的な作品を比較分析した事例、方法ともに、従来に先行研究のない分野を開拓した意義は高く評価された。近代演劇、近代文化研究の大きなフィールドとして宝塚歌劇の重要性を提示した成果は大きく、審査委員会は博士学位の授与にふさわしい論文であるという見解で一致をみた。

公開審査会開催日	2017 年 4 月 8 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	児玉 竜一	日本演劇	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	小松 弘	映画史	
審査委員	立教大学文学部・特任教授	川崎 賢子	近代日本文学・文化	博士(文学)立教大学
審査委員				
審査委員				